

貴志川線に乗っていこう！ 伊太祁曽神社と奥の院 ―地域教材の開発と活用「歴史・地理探訪フィールドワーク」―

【研究代表者】山神達也（和歌山大学教育学部）

【共同研究者】海津一朗（和歌山大学教育学部）・山口康平（附属中学校）・川嶋里枝（附属中学校）

【活動の概要】和歌山大学教育学部附属中学校社会科では、本学の海津ゼミ（日本史）と共同でフィールドワークを実施しており、今回が15回目となる。平成29年度から山神（地理学）が加わり、歴史的視点に加えて地理的視点からも地域を体験・観察している。今年度は伊太祁曽神社周辺を対象とし、地域教材「貴志川線に乗っていこう！ 伊太祁曽神社と奥の院」を作成した。2019年12月15日（日）にフィールドワークを実施し、教材を作成した案内役の大学生13人、附属中の生徒2人、共同研究者の4名が参加した。

1. はじめに

平成29年度後期から海津（日本史）と山神（地理学）の2名が担当する中等教育エキスパート科目「社会科地理歴史分野学習内容構成論」（学習内容構成論）が開講した。当初は別個に教科書分析を行うことを想定していたが、共同担当する以上は一緒に何かしようということになった。そこで、海津ゼミが和歌山大学教育学部附属中学校の山口と共同で企画・実施してきた「社会科歴史探訪フィールドワーク」に山神が新たに参加して、地理的観点からの学習活動も加えることになった。このフィールドワークは今回で15回目の実施となる。

本課題の活動は、教育学部の学生が地域学習を深めて地域教材を作成し、その成果をもとに中学生とともにフィールドワークを実施し、学生がその案内役を務めるというものである。かかる活動の第1の目的は、学生・中学生ともに、現場を見学・体感して学びを深めることの楽しさやその重要性を知ることにある。そして第2の目的は、教材研究の重要性やその成果を児童生徒の学びにつなげることの難しさを教育学部の学生に実感してもらうことにある。本課題を通して教育学部の学生が学びを深めていくが、それは中学生の案内役を務めることで得る部分が多い。こうした活動を実践できるのは、共同研究者の山口と川嶋の協力に負うところが大きい。

本年度のフィールドワークは和歌山市の伊太祁曽神社周辺で実施した。地域の選定では、学生になじみがないことを条件として、伊太祁曽神社周辺と加太地区のどちらかから学生に選択させた。なお、海津はこの地区の景観復元を手掛けた実績があり（海津 2009）、山口はこの地区を通るわかやま電鉄貴志川線沿線の存続運動に関する授業実践の実績があった（山口 2013）。一方、この地域に関する研究実績のない山神は、現地での事前調査と各種史資料の調査を行い、フィールドワークに備えた。

フィールド選定後、学習内容構成論の授業において、伊太祁曽神社周辺の新旧地形図の読解、空中写真の実体視による景観観察、地名辞典や『紀伊名所図会』などの史資料の読解を実施した。11月9日（土）には、現地の下見を実施し、フィールドワークでの学習内容を検討した。その後、学生は案内する内容の担当を割り振り、各担当の学習内容についてのワークシートの作成に取り掛かった。12月6日（金）の授業には附属中学校から山口が参加し、ワークシートの構成や内容について助言した。その後、担当者間での内容の調整も含めたワークシートのブラッシュアップを継続し、フィールドワーク本番に備えた。

2. フィールドワークでのおもな学習活動

フィールドワークは2019年12月15日（日）に実施した。参加者は総勢22名で、その内訳は、ワークシートを作成した案内役の2回生13人、附属中の生徒2人、オブザーバー参加の3・4回生3名、本事業の担当である海津、山口、川嶋、山神の4名であった。当日は快晴で、心地よいフィールドワーク日和となった。

フィールドワークでは、各ポイントで案内役の学生がワークシートを配布して学習活動を展開した。各ポイントでのワークシートをクリアファイルに差し込んでいくことで、フィールドワーク終了時に地域教材「貴志川線に乗っていこう！ 伊太祁曽神社と奥の院」が完成するという手順を採った。図1はフィールドワークの経路と学習活動を実施した各ポイントを示したものであり、以下に各ポイントでの学習内容を整理した。

- ①貴志川線について（石原・佐藤）：過去から未来へのつながりを意識して、貴志川線についての理解を深める。まず、貴志川線の歴史を把握する。その後、図表・写真の読み取りや風景・現場の観察を通して、貴志川線の現状と課題、それへの取り組みについて考える。
- ②地図を活用しよう（塚野・三谷）：地図の有用性と活用法を理解する。地図と風景を見比べて、歩いたルートや現在地を確認する。歩幅を計測して 100m の歩測や歩いた距離の計算を行う。駅前の案内図を用いて地図の向きについて考える。
- ③伊太祁曽神社（上野・山本(律)）：伊太祁曽神社の歴史について理解する。伊太祁曽神社は誰を祀っているか、その背景はどのようなもので、そのことがどのような影響をもたらしたのかを考える。「キノクニ」。
- ④伊太祁曽神社探検隊（森瀬・山本(和)）：伊太祁曽神社の境内やその周辺にどのようなものがあるのかを知り、その由来について考える。鳥居と伊勢神宮の関係、道路元標、伊太祁曽古墳群、チェーンソーアート、お猿石、いのちの水などを確認して検討する。
- ⑤伊太祁曽と街道（大西・宮永）：新旧の地形図や『紀伊名所図会』を見比べて、六地藏が龍神街道と熊野古道の交差する地点にあり、伊太祁曽が交通の要所であったことを理解する。龍神街道沿いの風景を観察し、地域の歴史の変遷を理解する。
- ⑥熊野古道について知ろう！（泰田・山下）：熊野古道の概要を理解する。熊野古道のルートを確認し、熊野古道に関わる伝説や逸話を知る。平緒王子など王子社について知る。世界遺産との関わりから、地域の歴史が日本史や世界史とつながりを有することを理解する。
- ⑦四季の郷公園（柿本・林田）：四季の郷公園がどのような場所にできたのか、新旧の地形図や航空写真を比較しながら検討する。地図記号や航空写真、風景の観察を通して、地形や土地利用の変遷を考える。
- ⑧傳法院・丹生神社（長瀧・和田）：『紀伊国名所図会』を見て傳法院と丹生神社の境内を散策し、江戸時代から続く風景を体感する。傳法院と丹生神社の概要を知り、神幸祭の説明を通して伊太祁曽神社との関係を理解するとともに、授業で学んだ知識と関連付ける。



図1 フィールドワークの経路と各学習活動の実施地点
国土地理院「地理院地図」(2019年12月10日閲覧)をもとに作成。



写真1 最終目的地・丹生神社前での集合写真



③伊太祁曽神社



⑤六地藏



⑥熊野古道沿いの平緒王子跡



⑧傳法院の覚鑊堂前

写真2 各ポイントでの学習活動の様子

3. フィールドワークで案内役を務めた学生の感想

フィールドワーク実施後、学生に「反省点と良かった点」、および「今後に向けて」という点から感想を求めた。以下にそれらを整理する。ただし、文意を損ねないよう、報告者が抜粋・要約するとともに、表現を改めたところがある。また、下線は報告者が付した。なお、丸囲みの数字は前述した担当箇所を示す。

- ①石原：反省点としてまず、現地調査をあまり行えなかったことがある。また、フィールドワークの最初の担当で、うまく流れを作りたいところだったが、もたついてしまった。さらに、レジメの順番通りに進まなかったことで中学生を混乱させてしまった。レジメは現場で説明する順番に作るべきであった。一方、良かった点として、貴志川線は赤字続きであることやその改善に向けた様々な挑戦を行っていることを理解してもらえたことである。また、駅を降りたときに外国人観光客が来たことから、貴志川線が観光も売りとしていることやパークアンドライドについての説明をその場で臨機応変に実施できたのは、レジメにはないが重要なことである。今回の反省を踏まえ、中学生を引っ張るための声掛けなどを意識したい。また、中学生にある知識を理解させるためには、資料を深く調べ、理論を立てて理解しておく必要があるのだ、その術を授業づくりへと活かしたい。加えて、中学生に伝わる資料を作成する必要がある、資料作成においても学ぶことが多かった。
- ①佐藤：ゼミ合宿と重なりフィールドワークに参加できていないので、教材づくりの過程やフィールド実施後の反省会での様子を検討したい。まず、反省点として、レジメに書き込むところを多くしてしまったことと、他班との兼ね合いがうまくとれていなかったことのふたつが挙げられると感じた。フィールドワークに行った友達から空欄は書きにくそうだったとの意見を聞き、確かにそうだと納得した。どのようなレジメが適切かは難しいところだが、少なくとも改善が必要である。また、他班がどこまで説明するのか、どこで引き継ぐかについて事前に確認しておく必要があったという意見も聞き、レジメを作る段階から情報交換をやっておくべきだった。以上の反省点を今後の学習活動に活かしていきたい。
- ②塚野：良かった点として、何度も伊太祁曽に足を運び毎回新しい発見があったことや、中学生が歩測に興味を示したこと等が挙げられる。一方、反省点として、用意したワークシートを全て終わらせることが出来なかった点がある。ワークシートの最後の問いとして、歩測をもとに総歩行距離を計算する問いを用意していた。しかし、伊太祁曽駅に戻ってきた時には解散予定時刻になっていたため、そのまま解散してしまい、最後の問いを解くことが出来なかった。また、この問いに関連して用意していた、地図と実際の景色を比べることも出来なかった。このフィールドワークは、相手の立場になって考えることが出来る良い機会だった。また、教師になった時、身近な地域を地理的視点や歴史的視点で観察することが出来れば、生徒たちの興味・関心を引き出すことができ、有意義な学習になると考えた。加えて、現地を歩くこと、現地で調べることの重要性を感じた。微妙な土地の高低、田畑・果樹園の様子、住宅の様子、無人販売所の様子等、現地を歩かないと気付かないことが多い。これからは様々な地域について興味を持って調べ、積極的に現地へ出掛けてフィールドワークを行い、未知の世界を知りたいと思う。
- ②三谷：良かった点として、本番までに地形図を持って何度も伊太祁曽周辺を訪れたことと、それを活かして工夫した取り組みができたことである。伊太祁曽周辺では、日中と夜とで景色が違った。また、知らない土地であったため、何度も地形図とにらめっこした。今まで1つの土地にスポットを当てて調べるという経験がなかったので、良い経験になった。反省点として、途中で目にする風景について問えなかった。また、このフィールドワークのテーマを問われたときに答えられなかった。あらかじめテーマを考えていれば、結果は違ったものになっていただろう。伊太祁曽駅前にある案内図から中学生の興味・関心を引くことができたことはよかったと思う。中学生は看板の向きと実際の向きが違うことにすぐ気が付いた。当日、100mを歩測する実技を行ったが、これは日常生活にも活かされるだろう。今回、下調べや下見を楽しみと感じた。また、中学生を案内したことで、知識はいくらあったとしても困らないし、うまく説明するには技術や工夫が必要だと痛感した。残りの大学生活約2年間は、色々な場所で多くの経験をし、それを伝えることができる先生になりたいと思った。
- ③上野：伊太祁曽神社班の反省点は4つある。1つ目は、時間配分を考えることができなかったことだ。2つ目は、伊太祁曽神社についての調べが足りず、伝える内容が曖昧になったことだ。3つ目は、説明中心になってしまい、生徒側から疑問を引き出すことができなかったことだ。4つ目は、他班との連携が取れていなかったことだ。一方、全体でよかった点は、前半でおしてしまった時間を後半の人たちが調整し、終了予定時刻に間に合わせた点である。今後に向けては、ワークシートの作り方に工夫が必要である。例えば、ワークシートの穴抜き形式をやめ、本やホームページに記載されているようなその場では確認できない資料や解説を書いておくこと、書き込むのであればファイル形式ではなくバインダーを使うことなどが考えられる。
- ③山本(律)：今回のフィールドワークでよかった点は、和歌山が木の国と呼ばれていたことを話した際に、「じゃあ、なんで今は紀の漢字を使っているんだろう」とこちらの指示なしに生徒たちが考えてくれたことである。「自ら疑問を持ち、考える」は今回の目標だったため、良かった点といえる。また、生徒たちに紹介しながら進んでいく過程で新たな発見が出来たことや、伊太祁曽神社周辺の班と連携して伊太祁曽神社という一つのまとまりで紹介出来たことも良かったといえる。一方、反省点は、伝えたい情報が多いために内容が薄くなったことと、生徒たちが考える時間を十分に取れなかったことである。また、班同士での連携が不十分であったため、ブロックごとのつながりを持つことが出来ず、スムーズな切り替えが出来なかったために、所々で集中力が途切れていた。今回のフィールドワークを通して、実際に自分が感じたことを伝えることの難しさを実感することが出来た。今後、生徒と自分との感じ方の違いを考えながら授業づくりを生かしていきたいと考える。
- ④森瀬：このフィールドワークでは、個人的な反省点が多い。まず、下調べが不十分だった。ホームページや文献ばかり探していて、実際に行って発見することの大切さを見落としていた。自らが些細なことでも疑問を持ち、探究して説明できるよう学びを深めなければ、児童生徒の深い学びにつながらないと感じた。また、フィールドワーク本番では、説明や解説が長くなってしまい、生徒自らが興味関心を抱いて発見したり、疑問に思ったりする場面が少なくなった。例えば、ワークシートにクイズをまとめてそれがどこかを探すという形態にすれば、生徒の行動範囲が広がるし、より多くのものを見ることができて、自分で疑問を解決する達成感や学ぶことの楽しさを感じさせることができたのではないかな。また、フィールドワークは、教員にとって負担が大きいと気付いた。誰よりも深く学び、学ぶことが楽しいという実感を教員が持っていなければ生徒に伝わらないと思うので、残りの大学生活では、探究心を持ち、学びに対する意欲を捨てずに勉学に励む必要があると感じた。

- ④山本(正)：私が思う数少ない良かった点は、フィールドワークに参加した中学生たちに、教科書に載っていない知識を身近な地域で発見することが出来たと伝えられた点である。また、最初の貴志川線の説明の際、担当者が説明できていない内容を補足できたことも良かった点である。一方、反省点は非常に多かった。まず、取り組み始めるのが遅かったことである。また、中学生が自分で発見できるような説明ができていなかったし、調べてきたことを全て話そうとして本当に伝えたいことをうまく伝えられなかった。さらに、同じ担当の人と話し合う機会が不足していた。次に、全体の反省点として、各担当の意思疎通が出来ていなかった。お互いが他の担当者との連携を図れていたら、より良いフィールドワークになっていたと思う。今回のフィールドワークを終え、私は多くのことを学んだ。ここで学んだことを発揮すべき機会として、来年に控えている教育実習がある。先ほど述べた反省点を1つでも多く解消できるよう、勉学に励みたい。
- ⑤大西：ゼミ合宿と重なり当日は参加できなかったため、反省会で聞いた話をもとに論じる。反省点は、生徒が集落を地形図から読み取することに時間がかかってしまったこと、ワークの度に地形図を取り出すのに手間がかかったことが挙げられた。どのような生徒たちかわからない中で、私たちの想像力が不足していたことが原因であると考えられる。良かった点は、フィールドワークで得た知識をもとに、テーマを決めて資料を探し、自分の言葉でプレゼンする(レジュメ作成)経験ができたことである。他の授業ではできなかった活動だったので、いい経験になった。今回の経験を活かし、教員として校外学習を行うときには、授業前にフィールドワークを実施して、資料を活用して分かりやすく説明できるように能力を高めていきたい。
- ⑤宮永：良かった点として、準備段階でのインタビューや調べ学習を通して、伝えるべき情報を収集できたことが挙げられる。特にインタビューは、実際に地域に住んでいる人に聞かなければ分からない情報を収集することができた。加えて、当日に収集した情報をもとにしっかりと中学生に解説できたことも良かった。一方、当日に無駄な時間ができたことが反省点として挙げられる。特に私はリーダー役を任されていたため、声掛けをあまりできなかった点は反省すべき点であった。また、当日の進行をスムーズにするために意見交換すべきだった点も反省点である。今回のフィールドワークで、中学生に解説して新たな発見をさせることの難しさを痛感した。三回生で中学校に教育実習に行く際に、どのような教材を用いるか、どのような発見をさせるのかを、自分が調べ学習をしたうえで考えることができるようにしたい。
- ⑥泰田：良かった点は2点ある。1点目は熊野古道についての知識や理解が深まったことである。和歌山市を通るルートや熊野古道にかかわる伝説など、普段の授業で触れることのない内容について自ら学習し、苦労はしたが有意義であった。2点目は勉強したことを人に伝えるための努力ができた点にある。このフィールドワークで重要であったのは中学生に説明することであり、貴重な経験となった。一方、反省点も2点ある。1点目は、出来る限り理解を深めて本番に臨んだものの、知識不足が露呈したことである。中学生からの質問に対して曖昧な返答や浅い説明をしてしまい、説明する側としての責任に欠けていた。2点目も知識不足に通じるが、移動中に沈黙の時間があったことである。フィールドワークがポイントごとの説明になり、移動時間は中学生には退屈だったと考える。この沈黙の時間をどうできるかが、教師になった際の授業の充実度に関わってくると思う。このフィールドワークでの経験は、今後の教育実習や模擬授業での材料としたい。また、熊野古道のような世界遺産を題材とした授業づくりを学ぶことができたので、今後の授業づくりに生かしたい。
- ⑥山下：反省点は二点である。一点目は、伊太祁曽の熊野古道には二つのルートがある理由について、歴史的根拠のある資料を見つけることができなかった点である。二つ目は、ワークシートを活用できなかった点である。ワークシートを見る資料として作るべきだった。口頭で生徒に伝えようとしたが、歩きながらでは話に集中してもらえず、断念した。一方、良かった点も二点ある。一点目は、熊野古道が伊太祁曽を通っていることを生徒が知ったときに驚いてくれたことである。生徒のこの驚きは新しい学びに繋がるのではないかと考える。二点目は、平緒王子跡に設置してある熊野古道のマップを批判的に見るすることができたことである。このフィールドワークを通して、世界遺産と歴史を絡めて学ぶことは面白いものだと感じた。世界遺産は全世界共通の物であるため、日本史と世界史を絡めることができる。今回は熊野古道からサンティアゴ・デ・コンポステーラを関連させて生徒に伝えることができた。世界遺産から日本史、世界史をつなげた授業を作ってみたい。
- ⑦柿本：当日はゼミ合宿のためフィールドワークに参加していないので、ワークシートの内容を中心に反省を述べたい。まず、当日に配布された資料を見て気づいたが、地形図や航空写真などの資料が他所で提示されており、内容が被っていた。次に、四季の郷公園を自分の足で歩いたとき、トルハルバン像のことを完全に見落としとしていたことである。トルハルバン像は和歌山市と津州市の国際姉妹都市提携25周年を記念して贈られたものであり、これを中心にワークシートを作成することもできただろうし、入れることで一層深みが増したであろう。自分の巡検のいい加減さを反省したい。今回のワークシートづくりでは、国土地理院のHPを参照して完成させたため、事前の下見が意味をなさなかった。しかし、前述のトルハルバン像のことからもわかるように、そもそも下見が不十分であったことがわかった。今後は事前準備をしっかり行いたい。
- ⑦林田：良かった点として、子どもたちに考えてもらってから解説できた点である。また、図が不鮮明なものについて、拡大した見やすい図を用意していたことも良かった。一方、反省点は3点ある。1点目は、他班との情報交換不足である。他班の学習活動を把握していれば、他班が準備している合間を利用して説明することが可能だった。2点目は、ワークシートを活かしきれなかった点である。歩きながら説明をする班もあり、ファイルから出して書き込んでという作業が非効率的であったことから、資料的に使うかプラスアルファの内容を記載することで、子どもたちのあとの勉強につなげるほうがよいと考えた。3点目は、子どもたちとのコミュニケーションである。もう少し積極的に声をかけにいいと感じた。今回、伊太祁曽について調べ学習をしていくなかで、種々の資料に出会ったり各種の疑問が生まれたり、調べ学習の必要性がわかった。また、子どもたちに説明する中で、どのような質問をされても対応できるレベルにまで知識レベルを上げる必要があると感じた。普段から視野を広く持ち、様々なものに対して疑問を持ち、それを考え解決する力を身につけられるよう、学習に精進していきたい。
- ⑧長瀧：私たちが作成したレジュメは、『紀伊国名所図会』と変わらない景色を体感することを目的に作成したもので、昔の絵図を見ながら傳法院と丹生神社を歩くというプランであった。しかし、レジュメに書かれた現在地と異なる位置から説明をスタートしてしまい、子ども達を誘導せざるを得ない状況になってしまった。また、時間がオーバーした状態からのスタートだったため、時間のことばかり気にしてしまい、子ども達が本当に興味を示してくれている部分の説明も簡素なものになってしまった。しかし、他のグループよりも子ども主体が進められたことで、こちらが説明して終わるという一方的な展開にならなかった点が良かった。「えっ、なにこれ!」や「おもしろい!」という反応を得られ、最初の目標だった「子ども目線で何が気になるかを考える」は達成で

きていると感じた。今回、初めて子ども達を引率する側に立つことで、事前の下見がいかに重要かを身に染みて感じた。また、知識の詰め込みは意味が無く、子ども達に興味をもってもらえるような内容であることが最も大切だとわかった。今回学んだことをこれからの模擬授業や教育実習で活かせたらと思う。

- ⑧和田：良かった点は、参加した中学生が神社に興味がある生徒だったため、こちらの説明したい内容に食いついてくれた点である。時間が押していることもあってテンポよく進めたことも、中学生をうまく巻き込むことができた要因だと思う。詳しく説明できるよう情報は多く持って行ったので、自信を持って発表できた。反省点として、活動的な時間をあまり取れなかったことがある。唯一できたことと言えば、大日堂や覚鑲堂で屏から中を覗くことぐらいで、他は説明中心になってしまった。時間が無かったため、用意した情報もほとんど出すことができず、中学生にとってはワークシートに書いてあることが全てという発表になってしまった。時間が押している中でも、もう少し工夫ができたのではないかと反省している。準備を進める中で、何もないと思われている伊太祁曽で、「ここにきた中学生は何を不思議に思うのか」ということを念頭に置いて疑問点を探すという経験をし、何もないと思われる場所から何かを見つけることができるかどうかは、自分の気持ち次第であることがわかった。そして、授業づくりにおける教材研究がどれ程重要なことかも痛感した。教材として取り上げるものを良く知らないことと取り扱うことはできないと感じた。今回のフィールドワークの準備、そして本番で学んだことを今後の授業づくりに活かしていきたい。

4. 和歌山大学教育学部附属中学校からの参加者の感想

今回のフィールドワークに参加した附属中学校の生徒2名の感想をそのまま掲げる。

生徒 A：今回学んだ中で、心に残った所は2つあります。1つ目は、木の神ことイタケルノミコトがまつられている伊太祁曽神社、もう1つは熊野古道（紀伊路）です。どちらも身近な場所で歴史を感じる事ができたので、ロマンがありました。早速、学校のみんなにも言うてみようと思います。大学の教授の方々、そして大学生のみなさま、本当にありがとうございました。来年も行こうと考えています。

生徒 B：僕が歴史探訪フィールドワークに参加して印象に残った場所は、伊太祁曽駅です。駅は大正からあるらしく、古い印象でしたが温かみがありました。伊太祁曽神社には古ふんがあり、境内は味がありました。その他にも、たくさんの大学生とお話することができて楽しかったです。

5. 本研究課題の成果と課題

本課題の成果と課題は、上記の「3. フィールドワークで案内役を務めた学生の感想」と「4. 和歌山大学教育学部附属中学校からの参加者の感想」によく現れている。その要点は以下のように整理できる。

まず、案内役を務めた学生が地域教材を作成していく過程で様々な学びを得た。地域教材の作成では、教科書や参考書では情報入手が難しい。そこで、インターネットや文献などの資料調査と下見や聞き取り調査などの地域調査とを併用する必要があるのだが、多くの学生が実践できていた。また、中学生が興味関心を持つ資料とはどのようなものかを考えて教材を工夫することの重要性を感じた学生が多かった。とりわけ、目的をもって批判的に教材研究をすることの重要性を指摘した学生がいることの意義は大きい。加えて、この過程で学びが深まることに楽しさや充実感を感じた学生もいた。学びの中で新しい発見があること、それがさらに学びを深めていくことを案内役の学生が実感していれば、その内容が相手にも伝わりやすくなるであろう。

ただし、自らが深めた学びを中学生に伝えるという点で苦戦する学生が多かった。案内役を務めることで、自らの知識不足や理解の浅さ、事前準備の不足が露呈するのである。ただし、こうした点を自覚して反省点に挙げること自体は、本課題の成果の一つといえよう。理解していないのに分かったように解説して反省もしないという学生（未来の教員）では困る。教員といえども常に学びの過程にいるということを、肝に銘じてほしい。

学生の感想には他にも多くの成果・課題が挙げられているが、紙幅の関係もあり、不十分な整理となった。それらについては学生の感想に目を通していただきたい。また、今回も中学生の参加が少なかったが、身近な場所で歴史を感じたことが強く印象に残ったようである。年末での実施のため、希望していても参加できない生徒が多かったと聞いた。より多くの中学生にフィールドワークの面白さを体験してほしいという点で残念であった。ここで学んだ学生が教員になった折に、フィールドワークに積極的に取り組んでもらいたい。

【文献】海津一郎 2009. 『中世根来の内と外』 科学研究費補助金報告書。

山口康平 2013. 貴志川線存続運動を事例に住民参加の地方自治をまなぶ. 歴史地理教育 805: 48-51.